

紀要の発展のために

前主事 富田 仁

学校教育法第52条に、「大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とあり、簡単に言えば、教育と研究と人格の陶冶にあると思う。学校が単なる知識を授けるだけの機能であるとするれば、もはや学校はいらない。図書館と教育テレビ（ラジオ）だけあれば、十分に知識は得られるからである。教官との接触において、知的、研究的、道徳的態度を、学生は自然に学びとるから、いな、学びとらねばならないから、学校の存在意義がある。

大学には、以上の使命があるので、教官は教育、研究、人格の陶冶に勤めなければならない。教官の中には、教育をより得意とするもの、研究をより得意とするもの、診療をより得意とするものなどの個人差はあるが、大学の教官である以上、研究心を忘れてはいけない。その研究心を具体的に示すバロメーターが論文であることはいうまでもない。

本学の紀要は、原著論文を主体としているので、これを繙けば、本学の研究姿勢の要が分かる筈である。前人未踏のノーベル賞的な研究は、一生の研究業績が、運よく時代にマッチした場合のみであって、そんなものが毎年1本ずつ出る筈もないし、出たらおかし。どんな小さいことでも、自ら思索し、自ら実証し、それを文章にしておく姿勢が大切なのである。それには、絶え間ない観察と自然への問いかけが必要であると共に、絶え間ない読書が必要である。

すばらしいアイディアは、学生実習からでも湧いてくることがある。学生は純真であるので、過去のものにとらわれずに、奇抜な意見を出し、奇抜な実験をし、奇抜なデータを出す。それは、すべて間違であると決めつけるわけにはいかない。その中には、多くの真実があり、教えられることが多いので、過去の文献と今後の方針を示してやる姿勢が大切である。

絶え間ない読書は、専門書は勿論のこと一般教養のためのものも必要である。本学の図書室は、大変狭い。教養書が身近にあることは大変うれしいことではあるが、専門書が大変少い。医学図書館で購入している書籍は、本学では原則として購入しないことにしているためでもあるが、それにしても自慢できるような図書室ではない。書籍は、研究の基礎となるものであるから、今後益々整備されるだけでなく、十分活用されることを祈って止まない。

以上が、よい研究ができ、立派な論文の載った紀要へと発展して行く礎である。